

シンポジウムS6 今、『エイプの会』の意義を考える

11月5日 C会場 13:00-14:40

オーガナイザー：尾本 恵市 司会：岡田 守彦

日本の人類学史上、「エイプの会」（1937～）は特筆すべき出来事だった。それは、坪井正五郎の急死（1913）に伴い失われた人類学の「総合性」を回復させたいと考える若手研究者の運動と評価される。わが国の人類学研究・教育の現状を見る時、自然人類学と文化人類学との乖離に代表される、総合性の欠如が問題である。ともすれば忘れられがちな「歴史に学ぶ」という観点が、今こそ求められるのではなかろうか。このシンポジウムは、わが国の人類学の総合化に向けて一石を投ずるもので、活発な議論を求めたい。①人類学（霊長類学を含む）、先史（考古）学、民族学および民俗学の4分野よりシニア研究者4名が話題提起を行う。②上記発表に対し比較的若手のコメンテーターによる質問・コメントが出される。③フロアからの発言を含め質疑応答を行う。

S6-1 人類学の立場から／尾本 恵市

S6-2 先史学の立場から／今村 啓爾（帝京大・文）

S6-3 民族学の立場から／煎本 孝（北海道大）

S6-4 ヒトの総合的研究への民俗学の貢献／川田 順造（神奈川大・日本常民文化）

コメンテーター：小金淵 佳江・小西 信義・澤藤 りかい・中村 美知夫・橋本 裕子・山口 未花子・山越 言・山田 康弘・米田 穰